

聖書日課 『からし種』 2023.12.10-12.17

<p>12月10日 (日)</p> <p>詩編 26編</p>	<p>「あなたの慈しみはわたしの目の前にあり／あなたのまことに従って歩き続けています」(3節)。人生の荒野を日々歩き続ける詩人は、父祖が伝える出エジプトの雲の柱、火の柱を思い起こしているのだろうか。主の慈しみをひたすら目の前に、主の真実に背中を押されて、迷いながらも最後まで歩き通す道が、詩編で歌う「完全な道」なのかもしれない。</p>
<p>11日 (月)</p> <p>詩編 27編</p>	<p>「心よ、主はお前に言われる／『わたしの顔を尋ね求めよ』と。主よ、わたしは御顔を尋ね求めます」(8節)。「心よ」とわたしの心に呼びかけるのは、「もはやわたしではなく、わたしの内に生きておられるキリスト」というガラテヤ2:20が浮かんでくる。いろいろな課題に戦いを挑まれているような思いが心をよぎるとき、「心よ、主を待ち望め」との内なる声に従おう。</p>
<p>12日 (火)</p> <p>詩編 28編</p>	<p>「主よ、あなたを呼び求めます。わたしの岩よ／わたしに対して沈黙しないでください。あなたが黙しておられるなら／わたしは墓に下る者とされてしまいます」(1節)。詩人は、命を狙われているのだろうか。今、身を隠している岩よりも「主こそがわたしの岩」と信じて呼び求めるその声に、主との交わりの中でこそわたしたちが生きていけることを知らされる。</p>
<p>13日 (水)</p> <p>詩編 29編</p>	<p>「主の御声は力をもって響き／主の御声は輝きをもって響く」(4節)。ガリラヤ湖畔で「悔い改めて福音を信じなさい」。祭りの終わりの日に「渴いている人はだれでも、わたしのところに来て飲みなさい」。十字架で「エリ、エリ、レマ、サバクタニ」。弟子たちの只中で「平和があるように」。以上全てを証しする方が「然り、わたしはすぐに来る」…主の御声を聞く。</p>

聖書日課 『からし種』 2023.12.10-12.17

<p>14日 (木)</p> <p>詩編 30編</p>	<p>「(主は)ひととき、お怒りになっても／命を得させることを御旨としてください。泣きながら夜を過ごす人にも／喜びの歌とともに朝を迎えさせてください」(6節)。苦難を「主の怒り」と受け取って自らを見つめる機会とし、命を得させてくださる真の御旨を信じて生きる。執り成しの主であるキリストに直接会っていない旧約の人々にも、聖霊は働いていたに違いない。</p>
<p>15日 (金)</p> <p>詩編 31編</p>	<p>「まことの神、主よ、御手にわたしの霊をゆだねます。わたしを贖ってください」(6節)。最後の最後まで全力を尽くして生き抜こうとする人の叫び。世人のために霊肉をささげ切った十字架のイエスを詩編のこの箇所を重ね合わせて伝えたのは、ゴルゴタでイエスを見つめ通した証言者なのか、降誕からイエスの生涯を書きつづった福音記者なのか。</p>
<p>16日 (土)</p> <p>詩編 32編</p>	<p>「神に逆らう者は悩みが多く／主に信頼する者は慈しみに囲まれる」(10節)。主に信頼する者にも、悩みは多い。しかし、他の誰にも言えない悩みも告白できる相手として、主を信頼できる。そのとき、主は行くべき道を教えてくださる。悩みがなかなか解消しなくても、そこに注いでいてくださる主の目を感じ、不思議な慈しみ「善き力」に囲まれることだろう。</p>
<p>17日 (日)</p> <p>詩編 33編</p>	<p>「新しい歌を主に向かってうたい／美しい調べと共に喜びの叫びをあげよ」(3節)、「主は恵みの業と裁きを愛し／地は主の慈しみに満ちている」(5節)。クリスマスは、飼葉桶に生まれた赤ん坊に神の慈しみを見た人たちが、喜びあふれて「新しい歌」をささげる時。馬や兵の数を誇る「勝利」ではなく、十字架にあらわされた神の愛の「勝利」を心から賛美する時。</p>